福井県地域共同リポジトリ

独立行政法人 国立高等専門学校機構
福井工業高等専門学校
FUKUI NATIONAL COLLEGE OF TECHNOLOGY

Title	福井高専における子どもの哲学(p4c)の初実践について:附録(対話文字起こし、ワークシート記述)付
Author(s)	佐藤 ,勇一
Author(s)	中川 ,雅道
URL	http://hdl.handle.net/10461/28844

福井高専における子どもの哲学（p4c）の初実践について：附録（対話文字起こし、ワークシート記述）付

佐　藤　勇　一*　　中　川　雅　道**

First-time Practice of p4c at National Institute of Technology, Fukui College : A Practical Report

Yuichi SATO and Masamichi NAKAGAWA

This paper is a report on the first-time practice of p4c (Philosophy for Children) at National Institute of Technology (NIT), Fukui College, conducted on July 19, 2018. Our target group were the second-year students of the Department of Civil Engineering, where NAKAGAWA acted as the p4c's facilitator. SATO introduced to his class a philosophical dialogue as a homeroom activity. After the dialogue, SATO and NAKAGAWA collected the worksheets filled by the students. The aim of this paper is to grasp the uniqueness of the p4c method through the observation of dialogues and the analysis of worksheets, as a preparation for the incorporation of p4c into Engineering Ethics. The first-time practice of p4c at NIT, Fukui College builds a "intellectual safety" in the class. The analysis of the worksheets shows that the students reacted positively to the philosophical dialogue.

Keywords：Philosophy for Children, Homeroom activity, Engineering Ethics, Dialogue, Intellectual Safety

1．　はじめに

本稿は、福井工業高等専門学校（工業高等専門学校は、以下､高専と表記）の２年環境都市工学科の特別活動（HR）にて実施した p4c（Philosophy for Children〔子どものための哲学〕）の実践報告である。p4c とは、アメリカの小学校に哲学を導入するために、1970 年代にマシュー・リップマン（1922-2010）によって開発された対等に発言できる環境を実現するための工夫が施されている教育方法のことであり、現在ではオーストラリアやハワイなど、世界各地の国や地域で実践されている[(1)]。日本国内でも高校や専門学校など、さまざまな校種でそれぞれに工夫された取り組みが行われており、中川も神戸大学附属中等教育学校において中高生を対象に p4c を日々実践している。近年では、仙台市や白石市を中心とした宮城県の小学校・中学校・大学でハワイスタイルの「探究の対話（p4c）みやぎ」が組織的に取り組まれたり[(2)]、首都圏でカリキュラムとして哲学や哲学対話を導入する小学校や中学高等学校が出始めたりするなど、取り組み方にも多様性と広がりが見られる[(3)]。高専への哲学対話の導入も、東京高専や宇部高専で試みられ、それぞれ高専の特徴を生かした実践が模索されている[(4)]。

福井高専では、2018 年 7 月 19 日、中川をファシリテーターとして招いて、佐藤の担任する２年環境都市工学科の特別活動の授業にてはじめて p4c を行った。対話終了後、学生が対話を振り返るワークシートの作成・回収を行った。以下、２．p4c をすることになった経緯・動機、３．対話のルール・環境、４．対話の観察、５．ワークシートの分析、６．おわりに、の順に報告する。なお、対話の文字起こし、および、ワークシートの内容は、付録として報告後に添えてある。

*一般科目教室（人文社会科学系）　　**神戸大学附属中等教育学校

2．　p4c をすることになった経緯・動機

今回の福井高専における p4c の初実践には、二つの動機がある。一つは、授業への導入を目指した教育研究と関連する動機である。福井高専では、2022 年度以降、本科５年生を対象とした「工学倫理」が新設予定である。そこで、グループワークやアクティブラーニングに慣れた高専生の技術者倫理教育に、学生たちに考えさせる授業形態の一つとして p4c の導入を検討するとしたら、どういった学習範囲への応用や、どういった評価方法が可能か[(5)]、という問題意識を持った佐藤は、すでに哲学・倫理系の科目に哲学対話を導入している高専やその他の学校での実践報告を参考に、本科や専攻科で自身の担当・分担する科目で p4c を少しずつ試行し、技術者倫理への応用可能性（あるいは不可能性）を検討するという企てを着想した。そして、p4c を導入していくにあたり、まずは自身もこれを体験する必要を感じた佐藤は、中川をファシリテーターとして招く今回の企画に思い至った。したがって、今回の実践は、授業への p4c の導入のための準備作業という位置づけを持っている[(6)]。

もう一つの動機は、担任クラスのクラスづくりを目指したクラス運営と関わるものである。２年環境都市工学科は、リーダー的な学生も多く、決め事や課題を期限内に手際よくこなしていくことに長けている。その反面、じっくりと考える機会をそれまでの特別活動（HR）では持ってこなかった。また、福井高専では、１年生は５学科の混合クラスで、２年生以降は学科ごとのクラスとなる。学生たちは１年生の専門科目で互いに顔を知っており、すでにグループワークもこなしていたが、やはりクラス替え後であり、クラス全体で話す機会があった方がよいと思われた。そこで、p4c が「知的な安心感」[(7)]や「セーフティ」[(8)]の成立を目指した教育手法であることを事前に文献で知っていた佐藤は、初回の実践を担任クラスの特別活動で行うことにした。

したがって、今回の実践は、福井高専での p4c のキックオフとして、まずは特別活動の一環として行われたものである。以下、授業における評価方法の検討よりも、p4c のどのような特徴が「知的な安心感」を形成するのか、対話のルールや実際の対話の観察、ワークシートの記述から検討することの方に軸足を置いて報告する。

3．　対話のルール、環境

p4c は、輪になって行う。対話を行う場所は、可動式の机や椅子が設置され、或る程度の広さのある部屋が望ましい。今回は、２年環境都市工学科の教室（79 ㎡）ではなく、B-Lab（102 ㎡）で行った。床に車座になる場合を想定し、学生の服装は作業着など床に座ってもよいものであったが、部屋に十分な広さがあったため、椅子で輪をつくることにした。輪になって座ることで、教員も含めた学生全員が平等に意見を述べる状態が可視化されるところに p4c の特徴があるとまず言えるだろう[(9)]。

図１．コミュニティボール

また、コミュニティボールというツールを用いるところにも、p4c の特徴が認められる。コミュニティボールは、図１のように、チアリーダーの使用するポンポンを毛糸で作ったものである。福井高専の授業は 90 分であるが、対話を行う特別活動の時間は 50 分と短いため、コミュニティボールの制作は、事前に７月５日の特別活動の時間で、同日に行った席替え後のアイスブレイクも兼ねて行った。６つのグループに分け、グループごとにボールを作成した。その際、それぞれのグループのメンバー全員で順に毛糸を巻いていき、巻いている人がいくつかの簡単な質問に答えて自己紹介を行うという活動をした。毛糸でできているため、柔らかく温かみのあるコミュニティボールは、その制作場面においても和やかな安心感のある場の形成に役立つものであった。また、簡単なものであれ、制作がともなう活動は、高専生にも合うものだと思われた。

コミュニティボールの使い方、対話のルールについては、７月 19 日の対話において、ファシリテーター中川から以下のような説明があった。

・ボールを持っている人が話す。
・話し終わったらボールを次の話す人へ渡す。
・手を挙げている人がいなければ隣に渡したり、正面の人に渡したりしてみても良い。
・どんな発言・質問をしてもいいが、互いへの敬意は忘れない。
・特定の個人を貶める発言はやめましょう。

p4c では、ボールを持っている人が話すという簡単なルールにより、一人の発言を全員が聞く場が形成される。また、他人に敬意を持っている限りどんな発言もできるというルールを確認することで、対話におけるセーフティの形成が目指されている。安心感をもって自由に発言し、それを全員に聞いてもらえるという「知的な安心感」が形成されるという点に p4c の特徴がある。この特徴が今回の対話でも発揮されたことは、「p4c はもっと難しい感じなのかと思ったけれど、〔…〕全員に参加する資格があっておもしろかったし、楽しかったです（学生 28)」という学生のワークシートの記述にも現れている。

発言者がそのつど一人に限定されるルールにより、錯綜しやすい対話に順序が生まれるため、事後に時系列を明記した対話の文字起こしを作成したり、対話の流れに沿って観察したりすることも可能となる。今回文字起こしを作成するにあたり、録画機器を用いて対話を記録した。学生には、録画・録音記録は安全に保管し、研究終了後に消去すること、プライバシーを守り、リスクも利益もともなわないことを伝え、事前に学生および保護者に了承をとり、録画・録音について同意書をとった（録画不同意者５名、録音不同意者３名、未回答１名)。録画不同意者に配慮し、録画はホワイトボードを映して録音のみを検討した。そのため、以下の対話の観察では、対話中の学生の表情は考慮に入っていない。また、対話での発言とワークシートの記述での同一人物の特定のため、学生には個人情報のわからない番号を振り、発言が特定できない場合はアルファベットを振ってある。対話中、聞き取れない発言や、録音不同意の学生の発言、省略は、〔…〕と表記するか、〔　〕内に発言内容の趣旨を記した。対話の時間表記は録画の表示時間で表現している。

４．　対話の観察

教室移動をし、まずは椅子で輪をつくって着席し、ファシリテーターの自己紹介が行われた。事前に佐藤より輪になるという説明はなかったため、まずこれに新鮮さを憶えた学生がいた。事後のワークシートでも、「クラスが円になって話すことはほとんどないので貴重な体験になった（学生 30)」というものや「普通の授業と考え方が違う気がするので、楽しかった（学生 41)」というように、輪になって座るということが普段の生活や授業と異なった空間を形成していた。普段の教室から B-Lab へと移動したことも影響を与えていただろう。

その後、アイスブレイクとして、教員も含めて、互いにしゃべらずにコミュニケーションをとりながら、席替えをした。中川が「いつもとちょっと違う並びになっているんじゃないかと思います」と言うように、席替えをすることで、緊張が解かれるとともに、日頃の人間関係とは異なる発言環境が形成された。学生たちも、席替えに象徴されるような人間関係の組み換えが p4c を通じて生じることに気づいており、それは例えば「日ごろ話していない人やあまり話さない雰囲気の人の意味〔ママ〕を聞くことができたのでとてもおもしろかった（学生 19)」というワークシートの記述に読み取ることができる。

その後 50 分授業の半分ほどを使い（7：11-24：14)、この日に皆で話したい「問い」を決定した。まず、ホワイトボードに問いを書き出し、投票によって決定した。このときの学生たちの行動は非常に積極的であり、以下のアからニの 22 の問いが出された。

ア.「なぜ人間は死ぬのか（学生Ａ）１票」、
イ.「何故平泳ぎが生まれたのか（学生 25）2 票」、
ウ.「髪は黒か茶か（学生 10）11 票」、
エ.「なぜ人間は生まれたのか（学生 33)」、
オ.「なぜ頭のよさは皆平等じゃないのか（学生Ｂ）２票」、
カ.「生か生じゃないのか（学生９)」、
キ.「なぜ人を点数で判断するのか（学生 11)」、
ク.「物を買うなら柄か値段か（学生３)」、
ケ.「なぜ今暑いのか（学生２)」
コ.「なぜ人は付き合うのか（学生 21）１票」、

サ.「何故高専生は泳がないといけないのか（学生４）１票」、
シ.「何故高専生は男子の方が多いのか（学生19）５票」、
ス.「なぜたけのこの里派ときのこの山派は争うのか(学生32)8票」、
セ.「どうして北山宏光はイケメンと言われるのか(学生27)」、
ソ.「夜中の食べ物のおいしさはなぜすごいのか(学生39)」、
タ.「デートのお金は男性が払うべき、割り勘どっちか(学生38)」、
チ.「弟がほしいか、妹がほしいか（学生20)」、
ツ.「どうして彼氏ができないのか、やっぱ顔か（学生12と学生39)」、
テ.「どうして西島隆弘はあんなに完璧なのか（学生23)」、
ト.「なんでお金がたまらないのか、なんでやせれないのか〔ママ〕、なんで美人に生まれなかったのか（学生20)」、
ナ.「なんで食べ物を食べるとこんなに幸せになれるのか（学生23)」、
ニ.「なぜたくさん寝ても眠むい〔ママ〕のか(学生12）７票」。

出された問いには、問いアやエのようにいかにも哲学的な問いや、問いセやテのようにいかにも女子学生の問いと思われるようなもの、シのように高専特有のものまでヴァリエーションに富んだ問いが出された。中には、問いイのように、四泳法すべてについて規定の距離を泳ぐことが目指されているという福井高専の体育の事情を知らなければ何故問うのかわからないものや、問いカのような挑発的なものもあったが、ファシリテーターは、必要に応じて問いの前提知識や、問いの意味を訊ねていた。問いの意図を取り出すことは、問いを探求していく上で重要なことだと考えられる。今回選ばれなかった問いにも、性や食、金銭、家族などのテーマや、あるいはまったく思いもしないテーマが背景にあったことだろう。じっくり時間をかけて問いを決定していく時間においても、すでに参加者はさまざまなことについて考察し始めていた。

投票の結果、今回のp4cの問いは、ウの「髪は黒か茶か」に決定した。今回の問いの決定方法や決定結果は、学生に少なからず衝撃を与えたようである。ワークシートには、「Philosophy for Childrenときいて、何か難しいことをするのかと思っていたら、非常にわかりやすく、かつ楽しい内容だったので、とても驚きました(学生25)」という感想や、「色んな質問がある中で、髪が黒か茶という、日常的なものに決まったことに驚いた（学生29)」という感想も見られた。話す問いをその場にいる者で決定していくp4cの特徴は、今回の実践において、哲学対話と聞いて身構えていた学生たちの不安を取り除き、自らに問いを引き寄せる効果を発揮していたと言えるだろう。

対話は、p4cのルールを確認し、問いを出した学生に問いの意図を聞くことから始まった。

「(26：11）学生10：自分が今黒髪にしようかなと思っている。
中川：あー。みんなに聞いてみたいと。じゃあ、ここからスタート。欲しい人から。
〔学生41の名前が出る〕
学生D：とりあえず先生に渡して。〔笑いが起こる〕
(26：55）学生3：高校生の間は、男女黒。
(27：05）学生27：なんで？
(27：09）学生３：そういうことじゃね？まだ18歳未満は黒髪がいいと思う。理由？高専にいるからどちらにも大人にも高校生にもなれない感じだから。」

この対話のはじまりにおいて、まず気づく点は、「とりあえず先生に渡して」という言葉に現れているように、対話の最初は正解を探す、あるいは、教員の求めるような答えを探す動きがあることがわかる。しかし、p4cは自分たちなりに問いを探究するものである。学生たちもすぐにp4cの特徴を理解し、その後学生たち中心に探究が展開していった。また、最初に発言した学生３の「高専にいるからどちらにも大人にも高校生にもなれない感じだから」から、選ばれた問いが最初から大人との関係を問いかける問いだったということが分かる。さらに、この発言から、今回の問いにおいて高専と他校との関係が意識されていたことも汲み取ることができるだろう。実際、31：23には寮生が髪を染めている場合、地元に帰ったときにどこの高校かわかるという趣旨の発言が出た。

また、最初の学生が発言しているときに、学生27が「なんで？」と理由を聞いているのは特筆すべきことである。理由や前提、例示、差異、反例などを示すことは、対話において重要な事柄である。今回はこうした理由の重要さをとくに学生に伝えていなかったが、学生が自発的に理由を問いかけて発言を促しており、これ以降、学生たちが意識していなかっ

たとしても、単発の答えではなく、理由を話すコミュニケーションに自分たちの間で変わっていくきっかけとなった。

先程の対話を受けてしばらく黒派が続いたが、28：40に染める派の意見が出た。

「(28：40) 学生Ｆ：今高専生なんで、髪を染めれるのは高専生の特権なんで、染めたい人は染めるといいと思います。
〔ボールの受け渡しで笑いが起こる〕
(29：10)
学生Ｇ：僕も最初は〔…〕染めない。あっ
〔ボールが正面にとどかず、笑いが起こる〕
中川：名前を言えばいいよ。」

学生Ｆの発言には、髪を染めるということが高専特有の問題であり、今回の問いが学生たちの話したかった事柄だったことが分かる。高専、あるいは、佐藤担任クラスでは、１年生の時から髪を染めている学生が多く、中には入学してすぐ髪を染めた者もいる。昨年度の専門の授業や、今年度のクラス替えの後で顔を合わせたときに、怖く感じていた場合もあったようで、髪を染めている方もいない方も、互いに相手がどう思っているのか不安に思っていたと推測される。ワークシートにも、これは服装についてではあるが、「入学式からスカートがとても短い子とかがいて怖いなとは思っていたんですけど、その子も話してみるととてもおもしろくて、外見で決めつけるのはよくないなと思いました（学生 38)」とあった。今回の対話は、この後しばらく「どっちでもいい」という相対主義的な意見が続いた。どちらでもよいというのは、発言の忌避や議論の停滞にも思えるが、今回の場合はそうではなかった。ここではどの学生が染めているかは逐一書かないが、互いに相手がどう思っているのか確認し合う機会となっており、意外と同意見で互いに驚きあったりする発見の時間であった。

先程の対話からの引用を見ると、学生ＦとＧの発言の後、ボールの受け渡しをめぐって笑いが起きている。毛糸のボールのため投げても届かないこともあり、この後９回、ボールの受け渡し時に笑いが起きた。ボールを持つ人が話すというルールは、場を和やかにするとともに、ブレイクを生み、前の文脈と異なる発言も出やすくしていた。

そして、その後（30：47）に、根本から髪を染める理由を問う問いかけが現れた。

「学生 11：まあ、僕は、どっちでもいいんですけど、まず、髪を染める必要があるのかということに疑問を持ちます。染める必要ないし、染めたからどうこうなるわけでもなくて、実際変わるわけではないんで、染める必要はあるのかと思います。」

この問いかけは他の学生への影響が大きく、対話後のワークシートでも「「そめる必要がない」と言った人には驚きました（学生 27)」と印象的な発言として取り上げるものが 3 人いた。染めたいと思うのが当たり前と思っていた者にとって、また染める理由をとくに気にしていなかった者にとって、染める必要があるのかという問いかけは、さらなる思考を促すものとして受け取られた。

32：09 には、佐藤にボールが回り、男性の場合髪の毛がなくなるので、髪の毛のある間にいろいろしてもよいのではないかという趣旨の発言をすると、しばらく禿頭に関する意見が続いた。この脱線は明らかに佐藤の発言の影響を受けており、これは佐藤との、あるいは佐藤を含む教員との違う形でのコミュニケーションを望んでいる現れだと解すことができる。実際この後（34：16)、教員との関係について、次のような注目すべき発言が出た。

「学生 32：髪が痛むのはいやだ、うん怖いし、あと先生から目を付けられるのもいやなんで、黒のままがいいと思うんですけど、イメチェンっていうのに憧れるんで、茶色がいいかなって思います。」

「目を付けられる」というこの発言から、今回の問いの背景となっているテーマに、学校生活のルールや教員との関係があることを読み取ることができるだろう。ファシリテーターもそれまでの議論を振り返った上で、「目を付けられると思っているのは何でですか。あるいは色を変えるのは変なんですか」と問い、さらなる探求を促している。これ以降の時間は、この「目を付けられる」ということをめぐって対話が続いた。この辺りから学生が対話に慣れ、発言も長くなってきた。また、或る発言からしばらくしてその発言内容への応答が見られるようにもなった。発言時間が前

後するが、いくつかの話題にわけて対話をまとめる。

40:09に「学生30:何で目を付けられるのかっていうと、この学校、これから企業の人が来たりして、そういうのとか見ると、あー、髪の毛染めているんだっていうと、ああいう人もいるんだ、企業の人からしたら、いやな、ちょっと変な感じになると思うし、だから先生たちもいろんな人たちからそう思われたくないから、目を付けられるっていうか、気にしてくれているのかなと思います。」という発言を受け、42：36に、「学生１：一応この学校ではそういうの自由になっているけど、染めるのは自由っていうのは責任があると思うので、別に先生から目を付けられようと、企業の人から変な目で見られても、禿げても染めたのは自分の責任だから、責任がもてるなら自由に染めたらいいと思います」という発言が出た。企業や就職関連の話題は、すでに30:15に学生38が出しており、これへの応答でもあった。自由には責任がともなうという、日頃発言することのない学生１の発言は、対話でもワークシートでも反響を呼び起こしている。対話では44：10に学生14がこれに言及し、51:45でも学生７が就職と責任について発言している。46：05でも、学生34が髪を染めるのは個人の自由だが、外見が人を判断する材料になるため、誰にどう見られたいか自分で考えて決めるべきだと応答している。

他にも、タイムラグのあるやり取りが見られた。学生３の「日本人、そもそもの色が黒だから、それでも染めてない方がいいかなと。色を明るくしてしまうと、目立ってしまうから、自然と目を付けられてしまうんじゃないかと思います」という37：00の発言は、28：28に学生Eが発言した、生まれたときに黒であるから黒のままがいいという意見や、中川の色を変えるのは変かという問いかけへの応答と見なすことができる。そして、43:47に学生33から、「何か日本人は黒じゃないといけんて言うけど、世界で考えたらいろんな髪の人がいるし、何でも自由でいいと思います」という、学生３の意見とその理由への反論が出た。「世界」の髪の色という、今回の問いの世界となった高専という世界から一旦退いて出された論点は、その後の対話では続けられなかったが、ワークシートで２人、これに応答しているものが見られた。学生33やワークシートでの他の学生は、問いや意見の理由を探究することによって、批判的な思考を自発的に行っていたと言えるだろう。

さらに自分の発言の背景となる体験に言及する発言も見られた。

「(38:05) 学生16:去年そのたわしって言われたときには、〔笑いが起こる〕クラスのみんなが全員黒で、はじめてクラスで茶色にしたら、次からみんな、え、おまえどうしたの、ヤンキーになったのかって。黒のなかに一人だけ茶髪がいるって、先生からしたら目立ったんだなって。染めたからって、別にどうなるってわけでもなく、学生39みたいに、点数とっていれば留年することもないし。
(38：53) 学生21：何で目を付けられるか、そんなうわさが広まったことを多分先輩から聞いたんじゃないかな。〔…〕
(39：32) 学生11：目を付けられるのは、別に。髪色変えるだけではなくて自分が変わるわけで。ぐちゃぐちゃになって、みんなに鳥の巣って言われて。そういう意味でも、変わるだけだったら、別に自分は先生に目を付けられることはなかったんで。色を変えてもそんなに目を付けられることはないと思います。自分は。」

引用個所の学生21の発言の他にも41：17に学生40が発した部活の先輩の例のように、先輩との関わりの強い高専だからこその体験談もあったが、とくに引用個所の学生16が「たわし」と言われ、学生11が「鳥の巣」と言われたという、自分の体験をもとにした発言は反響が大きかった。また、48：43には、佐藤もかつて髪を染めたり長髪だったりしたという体験談をした。これも反響が大きく、学生たちの反応やワークシートの記述を見ると学生たちがこれをうれしがっていたことが分かる。体験談をするとき、発言者は自分の体験について発言するのだが、その発言したことによって発言者自身が形成される。発言は対話における発言者の位置取りであり、発言することで体験していたときや、それまでのその場での位置とは異なる位置が獲得される。教員も含め対等で平等な発言の場を目指すp4cの工夫は、こうした位置取りの変化を生じさせやすくしていた。

47：06には、質問も出た。

「学生６：自分は、染めたくないんでいいんですけど、もしすんごい頭の悪い人が染めたらどうなります？」

最初の p4c にも関わらず、学生から自発的に質問まで出たことは注目に値するが、それだけではなく、この質問内容が、髪染めという見た目の問題に成績が影響しているという思いがけない事柄を浮き上がらせている点に注目する必要があるだろう。この質問は、36:38 に学生 39 が行った、髪を染めても点数をとっておけばよいという発言や、45：45 の学生 32 の「先生が赤点とったりして、なんかもう、うっぷんばらしに〔…〕言ってくると思うんで」という発言を受けたものだが、成績という今回の問いの背景に隠れていた本質的なテーマを取り出している。今回は、問いの選択の段階でも、オ.「なぜ頭のよさは皆平等じゃないのか」、キ.「なぜ人を点数で判断するのか」という問いが出ていたことからも、成績は学生たちの話したかった事柄だということが分かる。今回の p4c は、最初の定期試験と次の試験の間の期間に行われたが、この間にクラス内で成績による階層秩序が形成され始めていたと推測される。特別活動の終了時刻（52：13）となり、中川は、「途中で、ちょっと思ったんですけど、変だったのは、頭の悪い奴が茶髪になったら言われるか問題って、それってもしかして頭の悪い奴って何をしても言われるんじゃないかって気になってきて、そうなると頭の悪い奴って人権とかあんのかなって思ってきたんですよ。これはなんか結構いろんなもんに派生するんじゃないかと思いました」とコメントし、対話を終了した。

5．　ワークシートの分析

対話終了後、「①自分の生活、あるいは自分が生きている世界とを繋げることができましたか？」、「②話し合いの中で新しい発見や新しい観点を見つけることはできましたか？」、「③自分の発言に対して理由や根拠を挙げることができましたか？」、「④印象的な他の人の発言に対して理由や証拠を書くことができますか？」の４つの設問が書かれたワークシートを用いて対話を振り返った。この A4 版のワークシートの左側には、４つの設問それぞれに対して、「1．できなかった、2．あまりできなかった、3．まあできた、4．それなりにできた、5．よくできた」の５段階の自己評価と、その評価をした理由を簡潔に書く欄が設けられており、右側は長文の自由記述ができるようになっている。このワークシートは事前に中川が用意したものであり、今回の回収率は 100% であった。ワークシートの項目は、p4c ハワイのルーブリックを参考に作成されたものであり、問いを世界と繋げていて、自分や周りの人たちの論証が分かっていれば高い評価になるようになっている [10]。

ワークシートの４つの設問の平均点は、設問①が 4.1 点、②が 4.0 点、③が 3.1 点、④が 3.7 点であり、図２からも見て取れるように、①と②がほぼ変わらず、③と④、とくに③の平均点が下がっていた。

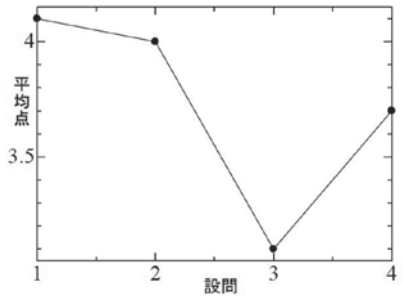

図２．横軸が設問①～④の番号、縦軸が平均点。

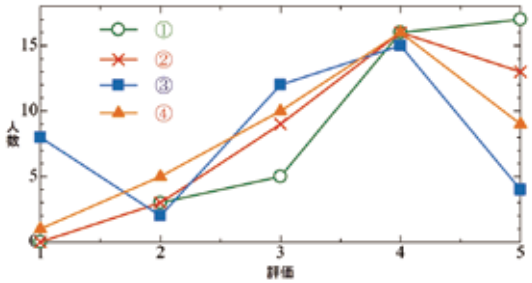

図３．設問①から④の５段階評価。横軸の数字が評価、縦軸が人数を表している。

また、設問①から④のそれぞれにおける５段階の評価の分布は、図３のようになった。４つの設問の折れ線グラフを重ねてみると、評価４に関しては４つの設問で人数に大きな差はないのに対して、評価５が最も高い①から②④③の順に人数が減っていること、最も評価５の人数の少ない③では評価１の人数が跳ね上がっていることが分かる。以下、評価５の数字にばらつきが生じたのは何故か、設問③と④で平均点が下がったのは何故か、設問③で評価１が多いのは何故か、これらの問いの理由について、設問①②③④の順にワークシートに学生が記した理由記述から検討しつつ、今回の p4c について考察する。

「①自分の生活、あるいは自分が生きている世界とを繋

げることができましたか？」という設問に対しては、評価１から５の内、５の評価をした学生数が17人ともっとも多かった。これは、実際にクラス内に髪を染めている者が多く、今回の問いが「身近な問いだったから（学生28)」である。また、学生の理由記述を見ると、「普通高校ではあまりない高専独自の問題だったから（学生38)」、「髪染めは高専と切っても切りはなせないことだから（学生25)」、「髪を染めていいという校風をよく他の学校の友達に言われるから（学生１)」とあるように、対話で選ばれた問いが、高専という自分たちが生きている場を考えさせるものであったことが読み取れる。

新しい発見や観点を問う設問②は、評価１（０人)、評価２（３人)、評価４（16人）で設問①と人数が同じであり、評価５が13人に減り、評価３がその分だけ人数が増加している。「自分が思う意見とは他に、自分にはできない発想がたくさんあったから（学生23)」、「先生に目をつけられるとは考えてなかったので少しびっくりした（学生10)」と書いていたり、髪を染めている学生が「黒の方がいいのかな。と少し考えさせられた（学生20)」と書いていたことから分かるように、今回のp4cを通じて、別の観点を新たに知ったり、自分自身を振り返ったりした学生が多かったため、設問①と平均点の変わらない高い評価となったと思われる。

しかし、評価３や２とした学生の記述を見ると、「似たような意見があったから（学生26)」、「自分がそめるかどうか考えていた時に思ったことばかりだったから（学生７)」、「身近すぎたから（学生28)」という記述もあり、身近であるが故に自らに引き付けて考えられた今回の問いが、同じ理由で想定の範囲内であったために評価を下げたと考えられる。なお、評価３や２の学生のほとんどが、長文の自由記述では、「意外と同じような意見でも人それぞれで、少しずつ意見が違っていて広がっていたのはとても驚きました（学生28)」、「いろいろな意見や考え方があっておもしろかったです（学生26)」、というように、似た意見の人による違いや、意外な人が意外な意見をいうことを発見し、それが楽しかったという趣旨の記述をしている。p4cは問いだけではなく、参加した人に対して新たな発見をすることができ、今回の実践ではそれが対話の楽しさと結びついていたと思われる。

設問③「自分の発言に対して理由や根拠を挙げることができましたか」は、平均点がもっとも低く、評価５をつけた人数も４人ともっとも少なかった。評価１をつけた人数は８人ともっとも多かった。「理由はあまり言えなかった(学生10)」、「あまり理由や根拠を挙げることができなかったから（学生23)」、「理由はのべれなかった。理由はあまり考えに深く考えれなかったから〔ママ〕（学生８）」というように、対話における自分や他人の発言の理由や根拠についてはあまり意識していなかったため、設問③と④では評価５が減り、平均点が下がったものと考えられる。

設問③のみ、他の設問と比べて突出して評価１が多かった理由は、発言できなかったり、発言してもあまり多く話せなかったりした学生が、低い自己評価をしたためと考えられる。設問③で評価１とした８人の内６人（記述なしの学生も含む）が、発言しなかったことを理由として挙げている。なお、評価１とした残りの２人は、「直感的に茶色がすきやから（学生39)」、「興味がなかった（学生37)」と記していた。学生39は、対話での発言では自分が髪を染める理由を言えなかったが、この記述欄でそれに応えようとしている。対話を振り返るワークシートによって、問いへの応答が継続している様子が窺われる。また、学生37は、長文の自由記述では、「皆が持っている意見がどういうものなのかしれて、面白いなと思い、興味も持てて、楽しかった」と書いている。設問１と設問３に興味がないと書いたのは、自身の髪型が坊主のため、今回の問いに興味が持てなかったと推測される。

また、今回発言できなかった学生も、自由記述では「自分が茶髪ということもあったので、楽しかったです（学生15)」、「クラスメートの新たな一面を知ることができてたのしかったです（学生13)」、「他人の意見に納得したり、疑問に思ったり、簡単な問いであるのに深く考えさせられました。とてもおもしろかったです（学生36)」とあるように、発言はしていなくとも、彼等が問いに巻き込まれて、新たな発見をし、じっくりと考える体験をしていたこと、そしてそれを「楽しかった」と捉えていることが分かる。

印象的な他の人の発言の理由や根拠に関する設問④は、設問①・②と比べて平均点が下がり、評価５をつけた人数も９人と設問①・②よりも減っている。理由や根拠を聞いていた設問③と同じく、設問④でも発言の理由についての

意識が薄かったと思われる。ここでは理由について考えていなかったという趣旨の学生の記述は見られないが、他の人の印象的なフレーズに注目する記述はあっても、その理由や根拠を示す記述がほとんどなかったことに、理由・根拠への無関心が現れていると言えるだろう。

しかし、すぐに注意しておくと、理由への無関心の一方で、前節で確認したように、今回の p4c において、理由が対話や思考を促す場面がいくつか存在したことも忘れてはならない。また先程確認したように、ワークシートで理由を考察しているものや、この設問④でも「「点数ちゃんと取っておけば髪を染めても大丈夫」それには納得できる。何故なら結局は成績が良ければ、誰もとやかく言わないから（学生４)」、「私はすべては自分の責任だという意見に同感します。髪を染めた影響はすべて自分にふりかかるものだからです（学生 13)」というように、他人の意見からその理由を考察しようとするもの、「日本人だから黒という固定概念に疑問を憶えた。留学生やハーフがいた場合どういう発言をするか気になるものだ（学生 18)」というように、他人の理由から新たな疑問を出すものもあった。このように、対話に参加した当人たちが意識していなくとも、実際の対話では理由が対話を促し、新たな問いを生んでいた。

とはいえ、設問④での「黒派も染めて OK 派も、どちらの意見にも納得、共感できたから（学生 16)」、「みんなそれぞれ意見を持っていて、賛成できるものや感心できるものなどあった（学生 14)」というような学生の記述から、今回の対話では、理由や根拠への問いかけよりは、それぞれの意見に納得したり、共感したり、感心したりする経験の方に学生たちの意識が向いていたことが分かる。しかし、これは p4c がいつもと違う人間関係を形成する力を持っていることの証左だろう。「意外に皆発表していたので、今まで生活していたクラスとは思えませんでした」という学生 21 の記述には、この驚きがよく現れている。学生 21 は設問④を評価２とし、「自分の意見ばかり言っていたから」と書いている。これは、いつもと違う人間関係が発生したことに気付き、学生 21 が自己を振り返ったが故の低い評価であったと思われる。今回の p4c は、普段から活発に意見を言ったり意見を聞かれたりする学生、反対に普段は意見を言わない学生のそれぞれが、もう一方の学生の意外な面に気付く機会となっており、対話を通じて学生たちがさまざまな発見をしていたと言うことができる。

６．　おわりに

輪になって座る、自分たちで問いを決定する、コミュニティボールを持っている者が発言し、全員がその発言に耳を傾ける。p4c には対等に発言できるよう工夫されたさまざまな特徴があった。これらの特徴は、福井高専における初実践でもその効果を十分に発揮し、今回の対話では、互いに敬意を持っている限りどんな質問も発言もできる「知的な安心感」を形成することに成功していた。ほとんどの学生が、ワークシートで楽しかった、面白かったと感想を書いており、またやりたい、「部活動の仲間など違うメンバーでもやってみたい（学生 33)」という声もあった。学生たちはそれぞれに問いの探求に巻き込まれ、たとえ発言していなくとも考察し、積極的に活動していた。

彼らが今回の p4c 実践を楽しく思ったのは、「知的な安心感」を背景として、問いを自分たちで探究することを通じて、さまざまな創造や発見があったからだと思われる。対話におけるタイムラグはこうした創造を生み出す源泉であり、コミュニティボールによるブレイクはこのような創造や発見を生みやすくするきっかけとなっていた。

対話の観察やワークシートの分析の節で確認してきたように、学生たちは問いを探究することで、思いがけず自分自身や他人を発見していた。この意味で、今回の実践が成功だったことは強調しておきたい。しかし、問いの探求のもつ創造性は、それが創造的である限り、完全に制御することは不可能なものであり、楽しさだけではなく、怖さや不安とも結びつく性格も持っていることは忘れてはならないだろう。今回の実践でも、学生たちは当初、期待だけではなく不安も感じ、何をするのかと身構えていた。正解をもとめて教員の顔色をうかがうような平均化や、挑戦的な問いなども、学生たちが問いの探求や知的な安心感が壊れるとすればそれがどこかを無自覚な仕方ではあれ感じ取り、それを探っていたことを示唆しているだろう。問いの探求による様々な物の見方の発見、自己の発見、他者の発見という場合、この問いの探求（あるいは探求された事柄）・自分・他人という三者の関係には、ずれや軋轢が

生じることがあると考えることは十分できる。対話や探求には危険もついてまわっている。

今回の実践が成功したのは、p4c のさまざまな特徴、および、ファシリテーターや学生たち自身が行ったさらなる思考を求める促しによって、自分の発見や他人の発見が問いの探求にしっかりと結びつけられたために、場のセーフティが確立したからだと思われる。p4c における自分の発見は、ありのままの自分という前もって形成されたものではなく、新たな状況として眼前で繰り広げられる対話の探求の場における自らの位置取りであり、こう言ってよければ、新たな自分の創造である。だからこそ、学生たちは、対話という探究の場で自分の意見が言えたということに満足感をおぼえたのだろう。自己の発見は探究と結びついたものであった。

もう一つの他人の発見でも同様であり、車座や毛糸のコミュニティボールのあたたかさが象徴するような、対等で互いに敬意をもつセーフティの確立された探求の場においては、予測不可能な他人への気づきは、むしろそれまでの人間関係の気づかなかった歪みを示唆するものであった。ここでは問いの探求と結びついて新たな他人の姿が創造されていた。この意味で、今回の p4c 実践は、特別活動としてクラスづくりの面でも十分に寄与するものであった。もちろん１回のみでクラスができあがるわけではないが、学生たちも変化を感じ取っていたことは、「今日初めて p4c を行って、クラスの仲を深めることができた（学生９）」という記述からも窺うことができるだろう。

なお、今回の実践は、授業への導入の準備作業という位置づけであった。まだ初回であり、最後に教科での学習や評価方法を考えた場合の注意すべき点を、あくまでも今回の実践からの考察に過ぎないが、問いの探求、自己、他者の３つの観点で一つずつ指摘して本稿を終えることにする。

問いの探求：今回の問いは高専の特徴が出る学生にとって身近な問いであった。教科と関連した場合、ワークシートの記述が今回とどのように変化するか、今後の実践で注視していく必要があるだろう。

自己：p4c において、意見が言えた場合は学生が満足感をおぼえるが、ワークシートでの設問③の結果に出ていたように、意見が言えなかった場合には低い自己評価につながっていた。また、できると思っていたが案外できなかったという経験によって、新たな発見にもつながる場合もあるが、この経験が自分に対する低い評価につながってしまう可能性もあった。これらの点を鑑みると、授業での導入の際には、再度発言の機会があるように、対話は複数回行うのが望ましいと言えるだろう。

他人：輪になって座るなどの p4c の工夫によって、他人との関係に関して、普段とは異なるセーフティのある関係が確立されるが、今回のワークシートで、「目のやり場に困った〔…〕耐性はついていたと思っていたけど、人前で話すことにもう抵抗が増えてしまっていたのが、なに気にショックでした（学生 32）」と記した学生もいた。この学生は問いも出し、発言もできていた。授業に p4c を導入する場合には、例えば、問いの提出についての自己評価を行う、p4c 以外の授業方法や評価方法との組み合わせを考える等の工夫をする必要もあるだろう。

付録１．　対話文字起こし

対話での発言とワークシートの記述での同一人物の特定のため、学生には個人情報のわからない番号を振り、発言が特定できない場合はアルファベットを振ってある。対話中、聞き取れない発言や、録音不同意の学生の発言、省略は、〔…〕と表記するか、〔　〕内に発言内容の趣旨を記した。対話の時間表記は録画の時間経過で表現している。

(1：56)
佐藤：紹介しますが、中川雅道先生です〔拍手〕。神戸から来られました。神戸大学付属中等教育学校の先生です。こうした p4c などの活動を常にしているそういう先生ですね。

(2：15)
〔中川、自己紹介、(4：00) に授業開始のチャイムが鳴る〕

(4：40)
中川：じゃあ、とりあえずアイスブレイクしてみます。どうするか。簡単です。今から皆さんしゃべりません。口を使ってはいけない。今日は話す授業をするんですけど、一番最初は口を使ってはいけない。コミュニケーションの練習をしてみます。えーと、口以外の何かを使って、今から円、

これ来た順番とかはいつもの順番に並んでいると思うんですが、こっち１月１日で、12 月 31 日で、誕生日順に並んでもらいましょうか。いいですか。こっちから１月１日でざあっと、しゃべらずに並び替えてもらいます。じゃあ、しゃべらずに並び替え。

(5：20)
〔席の並び替え〕

(7：11)
中川：ありがとうございます。どうでしょうか。ちゃんと並んでいるでしょうか。いつもあの時間あるときは確認してみたりするんですが、たまに誕生日順に並んでいないこともあったりして、やってみたりするんですけど、今日はちょっとあまり時間もないので。今からこんな感じで、いつもとちょっと違う並びになっているんじゃないかと思います。この並びで、今から皆さんで考えてみたい。考えて話す授業をしてみたいと思います。前に書いてある p4c って先程ちらちらと説明あったかもしれないですけど、Philosophy for Children という授業を今からやります。ショートバージョンですので、ぜひ楽しんでもらって、こんなもんなんかと体験してもらったら。私はかれこれ十何年間ずっとこれをやっておりまして、いろんな学校行って、けっこういろんなひととやっているんですけど、子どものための哲学、みなさん子どもかどうか、いやわれわれも子どもかどうか謎なんですけど。で、えーと、まず考えるためには、問いがいるんですね。問いがいります、いいですか。なんかクエスチョンがないと、何もできないので。今から、ホワイトボードがせっかくあるので、席はこのままで、普段生活していて疑問に思うこととか、何か授業を受けていてあれなんだろう、何でもいいですけど、家族としゃべっていてこんなこと疑問に思ったとか、何でもいいですけど、それを前に、ホワイトボードに書いてもらう。〔…〕前でいっぱいいくつか出たなかで、これならしゃべれるって問いを選んで、全員で多数決で選んで議論しようと思います。だいたい流れはわかりました？じゃあ、ちょっと隣としゃべってもらうくらいは全然ＯＫですので、思いついたやつ前に書いてください。

(9：45)
〔問いの書き出し〕

(18：16)
中川：じゃあ、えー、ちょっと見てもらって、あとはですね。皆さんこれから残り時間、〔…〕問いをみんなで考えてみようっていう〔…〕投票、一人一票です。多数決で決めていくんですけど。「なぜ人間は死ぬのか（学生Ａ)」、「何故平泳ぎが生まれたのか（学生 25)」。「髪は黒か茶か（学生 10)」、これどっちかがいいのか。「なぜ人間は生まれたのか（学生 33)」、「なぜ頭のよさは皆平等じゃないのか（学生Ｂ)」、「生か生じゃないのか（学生９)」、どういう意味？

(19：13)
学生 9：えーあの、刺身は生か、生じゃないのか。
〔笑いが起こる〕

中川：刺身。っていうか、刺身やったら生やと思うんですけど。〔笑いが起こる〕「なぜ人を点数で判断するのか（学生 11)」、「物を買うなら柄か値段か（学生３)」、えーと、服のことかね。「なぜ今暑いのか（学生２)」、これ難しいですね。「なぜ人は付き合うのか（学生 21)」、「何故高専生は泳がないといけないのか（学生４)」。何故高専生は泳がないのいけないのか。それでこんな平泳ぎとか。
〔笑いが起こる〕

(19：51)
中川：「何故高専生は男子の方が多いのか（学生 19)」。これはけっこう〔…〕質問ですね。「なぜたけのこの里派ときのこの山派は争うのか（学生 32)」。これよくあるパターンはどっちか、ということなんですけど、これ面白いですね、何故争うのか。「どうして北山宏光はイケメンと言われるのか（学生 27)」、これは、誰ですか？

〔笑いが起こる〕
学生 27：Kis-My-Ft2

(20：21)
中川：あ～有名人、僕はおっさんなのであまりわからないです。「夜中の食べ物のおいしさはなぜすごいのか（学生 39)」、なるほど。それはぜったいおいしい。「デートのお金は男性が払うべき、割り勘どっちか（学生 38)」「弟がほしいか、妹がほしいか（学生 20)」。今からなんですね。「どうして彼氏ができないのか（学生 12 と学生 39)」これは。（笑いが起こる）「やっぱ顔か」（笑いが起こる）。相談してきている感じがちょっとありますね。えーと「どうして西島隆弘はあんなに完璧なのか（学生 23)」これも一緒ですか、たぶん。誰？
〔笑いが起こる〕

学生Ｃ：AAA の人

(21：06)
中川：AAA の人、なるほど。「なんでお金がたまらないのか、なんでやせれないのか〔ママ〕、なんで美人に生まれなかったのか! (学生 20)」何か、ちょっとこわいですね。〔笑いが起こる〕「なんで食べ物を食べるとこんなに幸せになれるのか（学生 23)」「なぜたくさん寝ても眠むい〔ママ〕のか（学生 12)」

(21：22)
学生複数：眠いって字が違う

中川：あ。眠いが違う。えーと、じゃあ、決めてください。大丈夫ですか皆さん。後 25 秒後に投票しますんで。

(21：50)
〔投票。「髪の毛は黒か茶髪か」に決まる。(24：14)〕

(24：34)
中川：えー。それでは、これ使い方皆さん、ご存知ですか。私今しゃべっているじゃないですか。何でかと言うと持っているからです。簡単な使い方です。しゃべりたいと思う人が持っているというルールです。持った人がしゃべります。しゃべり終わったら、次の人にボールを渡したら、次の人がしゃべる。手を誰か挙げていたらその人に投げてもらってもいいですし、誰もいなかったら隣の人に渡しても別にいいですし、正面の人に渡してもいいです。そういう感じで議論していくって感じです。ただし、一つだけ、一番最初に言うのはこういうことです。どんなことをしゃべってもらってもＯＫですが、どんな意見を持ったり、どんな質問をしてもＯＫです。ただし、この場にいる人たちへの敬意がある限りで、っていうのが一応ルールです。つまり、誰かを貶める発言とか、そういうのはやめましょうってことですね、それ以外の配慮した上での発言はどんなことを言ってもどんな質問をしてもＯＫです。そういうルールでスタートしたいと思いますが、もしよかったら問い出してくれた方はどなたでしょう？はい。じゃあ、問いの意図、こんなこと考えていたということがあれば。

(25：59)
〔学生 10 が起立する〕
中川：あ、立たんでええよ。
〔笑いが起こる〕
学生 21：すげーかわいい。

(26：11)
学生 10：自分が今黒髪にしようかなと思っている。

中川：あー。みんなに聞いてみたいと。じゃあ、ここからスタート。欲しい人から。

〔学生 41 の名前が出る〕
学生Ｄ：とりあえず先生に渡して。
〔笑いが起こる〕

(26：55)
学生３：高校生の間は、男女黒。

(27：05)
学生 27：なんで？

(27：09)
学生３：そういうことじゃね？まだ 18 歳未満は黒髪がいいと思う。理由？高専にいるからどちらにも大人にも高校生にもなれない感じだから。

(27：49)
学生 21：自分的には高校生の間は、髪は黒がいいし。大人になったらいつでも染めれるわけだから、やっぱり高校生、20 歳以下のときはまだ大人にはなりきれてない、親の意見の髪の色を〔…〕はい。

(28：28)
学生Ｅ：僕は黒がいいと思う。えーと生まれたときに黒なんで、そのまま黒がいいと思う。

(28：40)
学生Ｆ：今高専生なんで、髪を染めれるのは高専生の特権なんで、染めたい人は染めるといいと思います。
〔ボールの受け渡しで笑いが起こる〕

(29：10)
学生Ｇ：僕も最初は〔…〕染めない。
あっ
〔ボールが正面にとどかず、笑いが起こる〕

中川：名前を言えばいいよ。

学生Ｇ：〔…〕

(29：26)
学生H：僕は似あえばいいと思います。

(29：40)
学生 23：えと～、私は、別にやってもやらんでも、自分が染めたいなら染めればいいと思う。

(30：00)
学生 39：〔ボールが渡って〕うっ。〔笑いが起こる〕　似合う人は何しても似合うんで、いいなって思います。

(30：15)
学生 38：会社とかが厳しいところだったら〔…〕染められないかもしれないので、〔…〕５年間は　やっぱりいろいろなことを経験したらいいと思います。

(30：33)
学生Ｉ：似合っていればいいし、何でもいいなと思います。
〔ボールの受け渡しで笑いが起こる〕

(30：47)
学生 11：まあ、僕は、どっちでもいいんですけど、まず、髪を染める必要があるのかということに疑問を持ちます。染める必要ないし、染めたからどうこうなるわけでもなくて、実際変わるわけではないんで、染める必要はあるのかと思います。

学生Ｊ：そこから
〔笑いが起こる〕

(31：14)
学生 31〔笑いが起こる。髪を染めているため。〕：あります。んーと〔…〕
〔ボールの受け渡しで笑いが起こる〕

(31：23)
学生２：〔髪を染めていると地元に帰った時に何高校かわかるという趣旨の発言〕

(31：50)
学生 41：えっとー、何でもいいです。

(32：09)
佐藤：公式発言としては、まあ、黒の方がいい気がするけれど、〔…〕そもそも男性の場合、髪の毛がなくなりますから〔笑いが起こる〕。髪の毛のある間にいろいろするのもひとつありかもしれないですね。

(32：26)
学生 25：黒がいいと思います。染めるとはやく禿げると思います。はげるのなら、なるべく禿げる時期は遅らせたいので黒がいいと思います。

(33：00)
学生Ｋ：白髪があるなら染めた方がいいと思います。
〔笑いが起こる〕

(33：08)
学生 16：別に染めたい人は染めればいいと思います。でも去年染めたら担任の先生に、いきなり「たわし」って言われて、(笑いが起こる) そこから半年くらい渾名が「たわし」ってなって、それぐらいなら染めない方がいいかと〔…〕

(33：28)
学生Ｌ：もお終わんの？
〔笑いが起こる〕

(33：29)
学生 16：そういうのがいやな人は染めない方がいいと思います。

(33：34)
学生 4：えーと、親が禿げてるなら、早めに染めてだんだん禿げていくのは仕方ないと思うんで、まあ、好きなようにする。

(33：59)
学生 34：〔潔く禿げればよいという趣旨の発言〕
〔笑いが起こる〕

学生M：潔く。

(34：16)
学生 32：髪が痛むのはいやだ、うん怖いし、あと先生から目を付けられるのもいやなんで、黒のままがいいと思うんですけど、イメチェンっていうのに憧れるんで、茶色がいいかなって思います。

(34：36)
中川：あの一、すごい、面白いなと。えーと、そうだな、これ聞いていいんすか？染めちゃだめなんですか？
〔口々に学生が答える〕

あー、そこまでルールみたいのはないんですね。ないけど、これは、めっちゃ気になったんですけど、先生に目を付けられるって皆さん思ってるわけじゃないですか。
〔口々に学生が答える〕

気にする人は気にする。それって、何でなんですかね。つまり、途中で面白いなって思ったんですけど、黒から茶色に染めるのは、もともとあるものを変えてるからよくないって言っている人がいたじゃないですか。途中でその質問があって、何で染めるんですかってってことを〔…〕。禿げになる前に染める〔…〕。私の場合は一度も迷ったことがないんですね。茶色にしようかと。私の場合は茶色にすると、多分、かなり本気の人になっちゃう。めっちゃこわいんちゃうかと。たまに、いっぺん。それこそ今年なんですけど、教員やっているんで髪型は気い付けているつもりなんですけど、ちょっとこの辺残してみたんですよ。〔…〕そしたらこわすぎて、大変ですって同僚に言われたんで。見た目ってけっこう髪型で変わりますよね。変わりますけど、目を付けられると思っているのは何でですか。あるいは色を変えるのは変なんですか。

(36：38)
学生 39：髪染めても、正直点数とっとけば〔…〕なところは、めっちゃ、あると思います。

(37：00)
学生 3：日本人、そもそもの色が黒だから、それでも染めてない方がいいかなと。色を明るくしてしまうと、目立ってしまうから、自然と目を付けられてしまうんじゃないかと思います。

(37：20)
学生 31：僕は目を付けられるとは思っていません。
〔笑いが起こる。髪を染めているため。〕

(37：42)
学生 N：染め〔…〕目を付けられる

(38：05)
学生 16：去年そのたわしって言われたときには、〔笑いが起こる〕クラスのみんなが全員黒で、はじめてクラスで茶色にしたら、次からみんな、え、おまえどうしたの、ヤンキーになったのかって。黒のなかに一人だけ茶髪がいるって、先生からしたら目立ったんだなって。染めたからって、別にどうなるってわけでもなく、学生 39 みたいに、点数とっていれば留年することもないし。

(38：53)
学生 21：何で目を付けられるか、そんなうわさが広まったことを多分先輩から聞いたんじゃないかな。〔自分の兄弟が目を付けられていたという趣旨の発言〕

(39：32)
学生 11：目を付けられるのは、別に。髪色変えるだけではなくて自分が変わるわけで。ぐちゃぐちゃになって、みんなに鳥の巣って言われて。そういう意味でも、変わるだけだったら、別に自分は先生に目を付けられることはなかったんで。色を変えてもそんなに目を付けられることはないと思います。自分は。

(40：09)
学生 30：何で目を付けられるのかっていうと、この学校、これから企業の人が来たりして、そういうのとか見ると、あー、髪の毛染めているんだっていうと、ああいう人もいるんだ、企業の人からしたら、いやな、ちょっと変な感じになると思うし、だから先生たちもいろんな人たちからそう思われたくないから、目を付けられるっていうか、気にしてくれているのかなと思います。

(40：52)
学生 2：〔茶髪は気にされないが、金や赤であれば問題という趣旨の発言〕

(41：17)
学生 40：〔部活顧問に先輩が目を付けられた。自分は黒髪にするという趣旨の発言〕

(41：39)
学生 27：えー〔…〕

中川：あ、いいっすよ戻って。

学生 27：何色に染めたいかは決めればいいと思うし、普段着れる服とか〔…〕

(42：36)
学生 1:一応この学校ではそういうの自由になっているけど、染めるのは自由っているのは責任があると思うので、別に先生から目を付けられようと、企業の人から変な目で見られても、禿げても染めたのは自分の責任だから、責任がもてるなら自由に染めたらいいと思います。

(43：23)
学生 23：別に目を付けているとかじゃなくって〔…〕だけだと思うから、目を付けられているわけじゃない。

(43：47)
学生 33：何か日本人は黒じゃないといけんて言うけど、世界で考えたらいろんな髪の人がいるし、何でも自由でいいと思います。

(44：10)
学生 14：染めたことないから正直わかんないけど、学生 1 が言っていたように、自分で責任をもって染めたら、目を付けられたら自分の責任だと思うし、まあ、どっちでもいい。

(44：33)
学生 35：このクラスは染めている人が多いんで、一人染めても別に目を付けられることもないし、自分が染めたいなら、ぜんぜん染めていいと思うんですけど。学生のうちにやりたいことをやっておいたほうがいい〔…〕

(45：14)
学生 37：僕は染めることはないと思います。
〔笑いが起こる。坊主頭のため。〕

(45：24)
学生 O：〔…〕やりたいことをやって〔…〕を尊重したらいいと思います。

(45：45)
学生 32：先生が赤点とったりして、なんかもう、うっぷんばらしに〔…〕言ってくると思うんで、やっぱり〔…〕のためにも黒のままがいいなと思うんですけど。どうなんでしょう？あっ。
〔ボールの受け渡しで笑いが起こる〕

(46：05)
学生 34：〔髪を染めるのは個人の自由だが、外見が人を判断する材料になるため、誰にどう見られたいか自分で考えて決めるべきという趣旨の発言〕。

学生複数：すごい。
〔ボールの受け渡しで笑いが起こる〕

(46：38)
学生 11：目を付けられるっていう点では髪だけじゃなくて、服もそうだと思います。一応制服があるわけだから、それを着てこないといけないっていうのが、まあ、自分もそうなんですけど。〔笑いが起こる〕そういう意味では目を付けられるのではないかと思います。

(47：06)
学生 6：えー。〔ボールの受け渡しで笑いが起こる〕自分は、染めたくないんでいいんですけど、もしすんごい頭の悪い人が染めたらどうなります？
〔笑いが起こる〕

(47：33)
学生 9：〔染めない方がよいという趣旨の発言〕
〔ボールの受け渡しで笑いが起こる〕

(47：59)
学生 41:えーと、染めて目を付けられるとか、染めて先生とか、企業の人とか、目を付けられるとか。学校として言ってくるわけで、先生には〔…〕言ってほしくない。あと、えーと、です。

(48：43)
佐藤：まーあのー、個人的な経験で言うと、私は昔の人なんで、中学は坊主校だったんですね。だから高校や大学に入ると、だいたい反動でみんな髪の毛伸ばし始めて、色が変わりますね。ちなみに、言っていいんかどうか。私も金髪でした。
〔どよめきが起こる〕
学生複数：やばいー。

大学 4 年生までは私は髪の毛は腰までありました。〔どよめきが起こる。その後、教育実習のときには髪型や服装を整えたという発言〕まあ、やっぱり就職のときは言われる可能性は、まあ場合によっては強いと思います。

(49：59)
学生 29：えー、髪は染めると肌が痛いんで、僕はもう染めることはないと思います。

(50：10)
学生 P：先生とかの話を聞いてて、何か染めない方がいい。自分の人生は 1 回しかないんで、自分のやりたいようにした方が僕は一番だと思います。

(50：30)
学生 3：同級生のプリクラとか見ていると、みんな若いなって感じる〔…〕若く見られたいうちは、〔…〕黒の方が周りの人からしたら若く見える、まあでも、イメチェンしたいとそういうふうに思うときは、思い切って銀にしたりすると逆に〔…〕自分は黒なんですけど〔…〕

(50：58)
中川：最後に。
〔笑いが起こる。外に見物人がいたため。〕

(51：45)
学生 7：染めるのは自分なので、就職活動のときはやっぱり黒の方がいいと思うし、今できるときに自分が責任とれるなら染めた方がいいと思います。

(52：13)
中川：〔終了のアナウンス〕途中で、ちょっと思ったんですけど、変だったのは、頭の悪い奴が茶髪になったら言われるか問題って、それってもしかして頭の悪い奴って何をしても言われるんじゃないかって気になってきて、そうなると頭の悪い奴って人権とかあんのかなって思ってきたんですよ。これはなんか結構いろんなもんに派生するんじゃないかと思いました。じゃあ、せっかくやってもらったんで、〔…〕いつもあの、このサインで出すってやっているんですけど。今日この 50 分で考えたかどうか、聞いていいですか。よく考えたらこれ〔親指を立て、上に向ける〕、まあまあはこれ〔親指を横に向ける〕、あんまりはこれ〔下に向ける〕。地獄に落ちろではありません。〔笑いが起こる〕じゃあ、全員出してもらっていいですか。

(53：23)
中川：ありがとうございます。下の人はあんまりいなかったんで、みんなよく考えていたんじゃないかと思います。じゃあ、最後、この紙だけ書いてもらって終了にしようかと思います。

(53：48)
〔ワークシート記入〕

付録２．　ワークシート左：設問部分

以下にすべて列挙する。ワークシートの学生の番号は、添付 1 の番号と一致している。

①自分の生活、あるいは自分が生きている世界とを繋げることができましたか？（平均 4.1）

５．よくできた（17/41 人）
学生１：髪を染めていいという校風をよく他の学校の友達に言われるから。
学生２：自分も髪をそめたことがあるから。
学生３：自分は昔髪をそめていたので、そう思われていたんだと思った。
学生６：自分はどうだろうと考えることができたから。
学生９：身近にいる茶ぱつを考えることができた。
学生 12：自分も今、染めているので、今までの生活も振り返りながら考えることができたから。
学生 14：自分は今、黒髪だけど、そめてみたいと思っていたから、深く考えることができたと思う。
学生 16：自分の体験を話すことができたから。
学生 17：自分の思っていることを言えた。
学生 21：自分も、もうそろそろ染めたいなと思っていたから。
学生 23：髪の色は自分の見ために関することだし、これからにも役に立てることができるから。
学生 25：髪染めは高専と切っても切りはなせないことだから。
学生 29：自分も髪を染めたことがあったから。
学生 31：自分は髪を染めているので、参考になった。
学生 32：問いが身近だったから。
学生 35：染めるかまよっているためさんこうになった。
学生 39：自分がそめているから。

４．それなりにできた（16/41 人）
学生４：自分も髪を染めたことがあるし、経験談を話せたから。
学生５：友達とこの話題で話したから。
学生 10：自分が黒にしようか、迷っていたから。

学生 13：髪染めに関しては自分の問題だと思っていたけど、そうでもないと考えたから。
学生 18:高専で、女子の多いクラスだから、男女ともにはっちゃけている現状で、みんながどのように考えているかを知れたため。
学生 19：自分の思っていたことを言えたから。
学生 24：自分は染めていないけれど染めた場合のメリットや染めない場合のデメリットなどについて考えられた。
学生 26：近くにそういった人がいて考えやすかったから。
学生 27：まあまあ興味があったから。
学生 28：身近な問いだったから。
学生 30：題名自体が自分が生きている世界で起きている身近なことだったので繋げることは難しいことではなかった。
学生 33：問いが身近なものだったから。
学生 36：自分の髪色について考えることができた。
学生 38:普通高校ではあまりない高専独自の問題だったから。
学生 40：先生に目を付けられたくないから黒髪のままでいようと思ったから。
学生 41：外国の人は髪の色が自由な感じがする。

３．まあできた（5/41 人）
学生７：自分はそめようとは思っていませんが、人生でそめてもいい期間というのは決まっていると思ったから。
学生 15：自分が今茶髪だから。
学生 20：自分も髪を染めているから。
学生 22：自分の生活や行動と比べながらきいていたから。
学生 34：高専には変わったかみの人がそこそこいるから。

２．あまりできなかった（3/41 人）
学生８：自毛が好きなので、「染める」という言葉に関心を持てなかった。
学生 11：自分は髪を染めることに興味がないため。
学生 37：興味がないから。

１．できなかった（0/41 人）

②話し合いの中で新しい発見や新しい観点を見つけることはできましたか？（平均 4.0）

５．よくできた（13/41 人）
学生２：普段あまり話さない人がどんなことを考えているのかわかったから。
学生３：黒がいいという人が少なかった。
学生 12：色んな人の意見を聞く度に、自分の意見と違うものがどんどんでてきて、なるほどなあと思うことが多かったから。
学生 14：染めていると目をつけられるとかいう意見が出たけど、髪がはでだから他人に見られるのではないかという意見もあった。
学生 16：いろんな人の意見を聞くことができたから。また、参考になったから。
学生 18：髪を染めることを、肯定している人も、否定している人もいたし、それぞれの考えを知れたため。
学生 23：自分が思う意見とは他に、自分にはできない発想がたくさんあったから。
学生 31：皆の意見を知ることができた。
学生 32：色々な意見があったから。
学生 35：茶色にはしたくないと思った。
学生 39：黒髪がみんな好きなんやなあって思った。
学生 40：他人の自分の見る目が黒髪と茶髪とでは変わるということを聞いたから。
学生 41：先生はなぜ髪の色が黒じゃない人に見〔ママ〕をつけるのか。

４．それなりにできた（16/41 人）
学生 1：先生に目をつけられるとはあまり思っていなかったから。
学生４：髪を染めれる理由が、身近に色々あったことに気付けたから。
学生５：自分にない思いを知れたから。
学生６：かみからべん強のことへのかんれんもできてよく考えられたから。
学生 10：先生に目をつけられるとは考えてなかったので少しびっくりした。
学生 13：上記のようなことを新しく見つけられたし、クラスメートの新たな一面も知れた。
学生 15：皆個人でいろいろな意見を持っていていろんな話を聞けたから。
学生 17:以外〔ママ〕と、黒髪派が多かったことが分かった。
学生 19：他の多くの意見を聞けたから。
学生 20：黒の方がいいのかな。と少し考えさせられたから。
学生 21：なぜ人は染めるのか？これについては確かにそうだなと思ったから。
学生 24：今までは染めた場合のメリットなど考えた事がなかったので皆の意見で新しい発見があった。
学生 25：確かに勉強の苦手な人は、何をしても目をつけられる気がします。
学生 29：染めるだけの行為に色んな影響が出るのだと思っ

たから。
学生 30：かみをそめるかどうかという問いに対して、今できるうちにやっておくということがあって確かに今くらいしかできないのかなと思った。
学生 38：自分とちがう意見の人もちゃんと筋が通っていたから。

３．まあできた（9/41 人）
学生８：髪で人は印象について判断する事。私は何も思わないが、判断する人がいることに気付かされた。
学生 11：友達の意見を聞き見つけられた。
学生 22：自分とは反対の考えの人の意見をしっかりきくようにした。
学生 26：似たような意見があったから。
学生 27：「そめるもそめないも自分の責任」という言葉には「なるほど」と思った。
学生 33：皆の意見が聞けて楽しかった。
学生 34：多数派が一般として認識されるのかなと思った。
学生 36：違う視点の話を聞くことができた。
学生 37：特になし。

２．あまりできなかった（3/41 人）
学生７：自分がそめるかどうか考えていた時に思ったことばかりだったから。
学生９：見つけれなかったから。
学生 28：身近すぎたから。

１．できなかった（0/41 人）

③自分の発言に対して理由や根拠を挙げることができましたか？（平均 3.1）

５．よくできた（4/41 人）
学生３：銀髪だった時にめちゃめちゃ見られたから。
学生 17：思ってること話せた。
学生 19：日常の中で考えていたことを話せたから。
学生 40：部活の先輩が髪を染めて怒られているのを見たから。

４．それなりにできた（15/41 人）
学生１：自由にするということは責任もついてくると言えたから。
学生２：自分の思っていることを相手に伝えることはむずかしいので大変だった。
学生４：〔記述なし〕
学生６：みんなに伝わったから。
学生 11：言えた。
学生 14：染めたことがないから、茶髪の方の意見を言えなかったが、自分の考えを伝えられたと思う。
学生 16：担任の先生に「タワシ」と呼ばれたことをしっかり言えて、自分の意見につなぐことができたから。
学生 24：染める、染めないは自分の気持ちや考えによるものであると言えた。
学生 25：まあ、それなりにできたから。
学生 29：染めると肌がしばらくの間痛かったから。
学生 30：証拠をあげるのに努力はしたけど、相手にどう表現すればいいかがうまく発見できなかった。
学生 32：テンパって言葉が浮かんでこなかったから。
学生 35：できた。
学生 38：したい事はいつできるかわからないのでできるときにしといた方が後悔しない。
学生 41：学校で良いとなっているから先生は口を出すな。

３．まあできた（12/41 人）
学生５：上手く発言できない場面もあった。
学生７：うまく言えたように感じなかったから。
学生９：書いた質問をちゃんと説明できた。
学生 10：理由はあまり言えなかった。
学生 20：私は黒でも茶でも似合っていれば全然良い。
学生 21：具体例を挙げて発表できたから。
学生 23：あまり、理由や根拠を挙げることができなかったから。
学生 26：発言していません。
学生 27：「金髪にスカート」の例を挙げたので。
学生 28：抽象的な答えになったから。
学生 33：〔記述なし〕
学生 34：それなりにできたと思う。

２．あまりできなかった（2/41 人）
学生８：理由はのべれなかった。理由はあまり考えに深く考えれなかったから〔ママ〕。
学生 31：あまり話しませんでした。

１．できなかった（8/41 人）
学生 12：発言できなかった。
学生 13：一回も発する〔ママ〕ことができなかったから。
学生 15：発言してないから。
学生 18：発言していません。
学生 22：〔記述なし〕
学生 36：話さなかった。

学生 37：興味がなかった。
学生 39：直感的に茶色がすきやから。

④印象的な他の人の発言に対して理由や証拠を書くことができますか？（平均 3.7）

５．よくできる（9/41 人）
学生２：いいことを言っていた人は、好意をもてるから。
学生３：全員なっとくできました。
学生 10：「自分の人生一度きりだから自分で責任を取れれば良い」
学生 16：黒派も染めて OK 派も、どちらの意見にも納得、共感できたから。
学生 17：〔学生 16〕のたわしがおもしろくて印象に残った。
学生 23：みんなの意見は、自分からは思いつけないけど、聞いたら「なるほど」「たしかに」と思うことができたから。
学生 31：黒派の人が多かったが、自分は染める派だからです。
学生 39：なっとくする意見がたくさんあった。
学生 40：〔記述なし〕

４．それなりにできる（16/41 人）
学生１：見た目は全てではないけれど、やっぱりその人を判断する要素の１つであるから、先生からの印象が悪くなることもあると思う。
学生４：「点数ちゃんと取っておけば髪を染めても大丈夫」それには納得できる。何故なら結局は成績が良ければ、誰もとやかく言わないから。
学生６：あたまがいい人はいいのだろうの〔ママ〕思った。
学生７：結局は染めるのも染めないのも自分自身の責任だから。
学生 13：私はすべては自分の責任だという意見に同感します。髪を染めた影響はすべて自分にふりかかるものだからです。
学生 14：みんなそれぞれ意見を持っていて、賛成できるものや感心できるものなどあった。
学生 18：日本人だから黒という固定概念に疑問を憶えた。留学生やハーフがいた場合どういう発言をするか気になるものだ。
学生 19：「たわし」や「とりの巣」など、きょうれつな言葉が出たから。
学生 24：染める必要があるのかという質問が印象的であった。
学生 25：日頃から色んな事に対して意見などを持つようにしているから。
学生 26：聞かれたことへの意見はあるから。
学生 28：自由には責任がともなうから。
学生 29：染める意味とは？染めるなら自己責任
学生 30：〔記述なし〕
学生 36：〔記述なし〕
学生 38：先生に目をつけられるとかときどきそんな先生もいるので分かりやすかった。

３．まあできる（10/41 人）
学生５：〔記述なし〕
学生８：髪をそめようがそめまいが、自分に責任がある事だと思うので、と〔学生１〕が言っていたことに共関〔ママ〕した。
学生 11：できた。
学生 15：いろんな意見を聞くことができたから。
学生 20：この学校では髪を染めていいことになっているから、言いたい人には言わせておけばいい。
学生 22：話している内容がおもしろくて、頭に入りやすかったから。
学生 27：他の人の発言をよくきいていて、納得したから。
学生 32：目のやり場に困っていたから。（あまり頭に入ってきていない。）
学生 34：経験則があるから。
学生 37：印象に残ったから。

２．あまりできない（5/41 人）
学生 12：自分と同じ意見の人がほぼいなかったから。
学生 21：自分の意見ばかり言っていたから。
学生 33：〔記述なし〕
学生 35：いろんな考えがあり覚えていない。
学生 41：あまり興味を持たなかった。

１．できない（1/41 人）
学生９：よく分からないから。

付録３．　ワークシート右：自由記述

一部を紹介する。

学生９：今日初めて p4c を行って、クラスで仲を深めることができた。人によって「目をつけられる」「頭がわるいなら染めない方がいい」など意見が違いおもしろかった。

学生 10：今日の p4c で普段なかなか話さない人の話を聞けたり、自分も自分の話をみんなに聞いてもらえたので、とても新鮮だった。また、いろいろな意見も聞けたので楽しかった。今後もこういう機会があればいろいろな話題で話していきたい。今日はとても楽しかった。またしたいです。

学生 13：今日、初めて p4c をして、クラスメートの新たな一面を知ることができてたのしかったです。クラスメートだけでなく、担任の先生の過去の髪事情を聞けて驚いたし、皆染めたあとのことも考えてやっていると分かって、今まで少し怖いなと思っていた人もいたけど、それが少しなくすことができました。p4c は哲学をやっている感じがないけど、恐らく哲学なんだろうから、とても良いものだと思いました。また機会があればやりたいです。

学生 15：今回の問いは、自分が茶髪ということもあったので、楽しかったです。目をつけられるという意見やハゲるという意見があって一回自分は黒に戻そうかなと思いました。でも、他の人の意見で、学生のうちにしかできないとか校則に決まりがないから全て自分の責任という意見を聞いて染めたいときに染めたり自分の好きなようにしたいなと思いました。

学生 19：今日はじめて p4c というものをしたが、日ごろ話していない人やあまり話さない雰囲気の人の意味〔ママ〕を聞くことができたのでとてもおもしろかった。それぞれの人が、たくさんの意見を持っていたため、自分もたくさんの意見を持てるようにしたいと思った。また違うことを言っている人でも接点があって、クラスでは３つくらいの分類に分けられると思った。とても楽しい授業だった。

学生 20：染める人を問で定めるだけでも話し合いの内容が変わってくると感じた。例えば、友達だったら何色にしても良いと思うけれど、付き合うなら金色や青色などの明るすぎる色は嫌だと思うからまた一層話し合いが違う展開になっていたのかなと思った。色々な人の意見が聞けておもしろかった。

学生 21：今回 2B というクラス全員でディスカッションではないけれど、それらしきことをして、意外に皆発表していたので、今まで生活してきたクラスとは思えませんでした。さて、今回の内容として、外見で人は変わると人は言っており、それは確かにそうで、しかし、自分に合った服装の合った髪色にしていればいいのかと思いました。

学生 25：Philosophy for Children ときいて、何か難しいことをするのかと思っていたら、非常に分かりやすく、かつ楽しい内容だったので、とても驚きました。友達の普段知ることのできない一面や、互いの意見を交わすことができ、良い経験になったと思います。話題は、「髪染め」についてでしたが、自分の学校とも深く結びついている事だったので、意見も持ちやすく、楽しく参加することができました。

学生 26：今回「髪は黒か茶か」という問いでしたことで自分が染めようか迷ったときの参考になりました。また、１人１人、意見は分かれるので、自分の好きなようにできるときにするのが良いのかなと思いました。私は茶髪にあこがれて１回だけ染めたけど、黒い髪が生えてきたりしていじすることがめんどくさいので黒でいいかなって思うようになりました。話し合ったことでいろいろな意見や考え方があっておもしろかったです。

学生 28：初めはほとんど話は広がらないかと思ったけど意外と同じような意見でも人それぞれで、少しずつ意見が違っていて広がっていたのはとても驚きました。また髪を染めている人と染めていない人がはっきりと分かれているので意見も別れて、皆が同じ意見になることはなかったなと思いました。p4c はもっと難しい感じなのかと思ったけれど、思っていたより取り組みやすく、全員に参加する資格があっておもしろかったし、楽しかったです。

学生 29：色んな質問がある中で、髪が黒か茶かという、日常的なものに決まったことに驚いた。また、髪を染めるという行為に対して、クラスの皆がどういう風に考えているのかという事が良く分かった。やっぱり、染めると頭皮を痛めるし、はげるのは嫌なので、これからは染めることはやめておこうと思います。でも自分は白髪が多いので、悩むところです。

学生 30：今回の授業（体験）を受けて、この題に関して改めて賛同できる意見もあった。クラスが円になって話すことはほとんどないので、貴重な体験になったし、" この人がこんなこと思っていたんだなぁ～ " など人を知ることもできました。こんな体験をもっと回数を増やしてできるといいと思いました。

学生 32：目のやり場に困ったりと緊張して疲れたな、と感じました。もうまぶたに力入れたくないぐらい疲れています。ドライアイです。ポロッとイメチェンしたいと言っ

てしまいましたが、やっぱり安定の黒の方が良いのではないかと、心の中では葛藤しています。耐性は付いていたと思っていたけど、人前で話すことにもう抵抗が増えてしまっていたのが、なに気にショックでした。

学生 33：今日の p4c の授業を受けて、１つの話題を皆で出し合い、決めて、話し合う事はとても良いと感じました。皆のそれぞれの考えを聞くと、自分１人では気づけなかった事に気づけました。高専では、他の高校に比べてもこのような授業や道徳などがないので、とても楽しかったです。また機会があるならば、部活動の仲間など、違うメンバーでもやってみたいと思いました。

学生 36：今日 p4c 授業を受けて一人一人持っている意見が違い、その人について知ることができました。他の問いに対しての皆の意見を聞いてみたいと思いました。他人の意見に納得したり疑問に思ったり、簡単な問いであるのに深く考えさせられました。とてもおもしろかったです。また、他の人の意見をきいて、なんとなくその人の人間性や生き方について感じることができました。大人数で議論することは問いの解決につながると同時に新しい問いが次々と生まれ、とても興味深いものだと思いました。

学生 37：たくさんの人の意見を聞いて、皆が持っている意見がどういうものかしれて、面白いなと興味も持てて、楽しかった。最初はつまらない感じになるかなと思ったけど、皆結構積極的に自分の意見を話せていて、つまらないと感じることはなく、最後まで聞いていて飽きることはなく、新しい見方や考え方が逆に広まったかなと思いました。

学生 38：自分は中学校の時から、高専に入ったら茶色にしたいと思っていて、したんですけど、したところで大きく変わることはなかったです。また、入学式からスカートがとても短い子とかがいて怖いなとは思っていたんですけど、その子も話してみるととてもおもしろくて、外見で決めつけるのはよくないなと思いました。初対面の人では、その人がどんな人なのか外見からしか分からないけど、外見と中身はともなわないと思います。

学生 41：こうゆう p4c という授業がたまにあると普通の授業と考え方が違う気がするので、楽しかった。他の人にはいろいろな意見があり、僕にはわからない意見もあったが、髪の色については、一人ひとりが自分で考えてその人は勝手にしていれば良いと思う。

註

（1）p4c の国内外における普及の歴史については、例えば以下を参照。河野哲也、『「こども哲学」で対話力と思考力を育てる』、河出書房新社、2014 年；藤井基貴・土屋陽介、「道徳化における「子どもの哲学」（P4C：Philosophy for Children）の導入―「哲学対話」授業の基本原理の検討と授業案・カリキュラム・評価の開発―」、『静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）』第 49 号、静岡大学教育学部編、2018 年、73-89 頁。後者の論稿によれば、「現在では、子どもの哲学は全世界 50 以上の国や地域で普及・実践されている」（75 頁）。

（2）p4c みやぎ・出版企画委員会、『子どもたちの未来を拓く探究の対話「p4c」』、野崎令照編、東京書籍、2017 年。

（3）p4c などの哲学対話は、こうした学校教育にとどまるものではない。現在、哲学対話は、市民のさまざまな活動で盛んに行われている。

（4）東京高専および宇部高専の取り組みは、P4C かたろうかい 2018（神戸大学附属中等教育学校、8 月 25 日）でポスター発表された。村瀬智之（東京高専）、「上級生による子どもの哲学の司会進行の試みとその意義」、および、小川泰治（宇部高専）「「高専てつがく」の試みの中間報告」。

　この他も、高専 Web シラバスを見ると、高専には、明石高専のように哲学対話を授業に導入している例や、クリティカル・シンキング、プレゼンテーション、グループワークなど、さまざまな取り組みの例がある。

（5）評価方法については、いくつかの研究が現れてきている。例えば、以下の研究を参照。中川雅道、「経験の原理と P4C ポスターの変化」『臨床哲学』18、大阪大学大学院文学研究科臨床哲学研究室編、2016 年、43-61 頁；河野哲也・得居千照、「子どもの哲学の評価法について―理論的考察と江戸川区立子ども未来館での実践を踏まえた提案―」、『立教大学教育学科研究年報』60、2016 年、41-55 頁；田中一孝・畑野快、「高等教育における「哲学的能力」の測定とその課題」、日本哲学プラクティス学会第１回大会（明治大学和泉キャンパス第一校舎、2018 年 8 月 26 日）。

（6）なお、付言しておけば、すでに哲学対話を哲学・倫理系の科目で先行的に実践している東京高専や宇部高専では、技術者倫理は哲学対話を実践している一般科目教員の関わるものではなく、高専の技術者倫理における p4c 実践の先行例がないため、また、そもそも哲学対話は実践の中から学ぶ性格のものであるため、学習範囲や評価方法は、その都度の実践を通じて検討しなおしていく必要があると考えている。また、実施する教室や学生の人数についても検討する必要がある。そのため、場合によっては、着想した企てに変更が生じるこ

ともありうる。

（7）中川雅道、「子どものための哲学」、伊藤潔志編『哲学する教育原理』、保育出版社、2017 年、122 頁。

（8）p4c みやぎ・出版企画委員会、前掲書、27 頁。

（9）輪になったり、コミュニティボールを用いたりする p4c の工夫が、「知的な安心感」をつくるためにさまざまな意味を持っていることについては、中川雅道、前掲書、121-126 頁参照。

（10）p4c ハワイのルーブリックについては、別の機会に中川が論じる。